

Title	体験的過去をめぐって：宮城県登米郡中田町方言の述語構造
Author(s)	工藤, 真由美; 佐藤, 里美; 八亀, 裕美
Citation	阪大日本語研究. 2005, 17, p. 1-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12058
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

体験的過去をめぐって—宮城県登米郡中田町方言の述語構造—

On Evidential Past Tense Form ; Predicative Structures of Nakada Dialect

工藤真由美・佐藤里美・八亀裕美

KUDO Mayumi・SATO Satomi・YAKAME Hiromi

キーワード；体験的過去、述語構造、アスペクト・テンス・ムード体系、丁寧さ、否定、
モーダルな複合述語、想起、発見

【要旨】

宮城県登米郡中田町の方言には2つの過去形があり、両者は、発話主体の体験性を明示するか否かというムード対立を形成している。このような2つの過去形におけるムード対立は、動詞述語、形容詞述語、名詞述語のすべてにある。また、否定形、丁寧体、モーダルな複合述語にも一貫してある。本稿では、中田方言の述語の包括的なパラダイムを提示する。同時に、体験的過去の意味・機能に焦点をあてながら、アスペクト・テンス・ムード体系全体を視野に入れて、その体系の中で相互作用しあう要素という観点から、個々の文法形式のもつ意味・機能を記述することが重要であることを述べる。

1. はじめに

宮城県登米郡中田町方言の述語は、標準語との比較において、(1)過去形が2つあり、(2)その一方は、発話主体の体験性を明示する過去テンス形式である、という点に最大の特徴がある。下記の例を参照されたい。「スワッタッタ」「アゲガッタッタ」「小学生ダッタッタ」は、「スワッタ」「アゲガッタ」「小学生ダッタ」とは違って、発話主体が直接体験していない出来事には使用できないという制限を有しているのである。以下、この形式を体験的過去形と呼ぶことにする。

・[太郎を目撃した場合] タロー キノナ コノ セギサ スワッタッタ (太郎は昨日この席に座った)

・[壁を見たことを思い出して] カベノ ペンキ アゲガッタッタ (壁のペンキは赤かった)

・[子どもの名札をよく見たら]アノ ワラス トナリマズノ ショーガクセーダッタッタ
(あの子は隣の小学生だった)

太郎を目撃していない場合には、「スワッタ」は適格でも、「スワッタッタ」は不可であるし、壁を見ていない場合には、「アゲガッタ」は適格でも、「アゲガッタッタ」は不可であるし、子どもを見ていなければ、「ショーガクセーダッタ」は適格でも、「ショーガクセーダッタッタ」は不可である。

体験的過去形は、(3)肯定形式か否定形式かを問わず、動詞述語、形容詞述語、名詞述語のすべてに見られるだけでなく、(4)丁寧体にも、さらには「ノダ」、「ハズダ」等のようなモーダルな複合述語にも一貫してある。

上記の(3)にあたる当該方言の述語構造の中心的な場合については、八亀他2005において記述を行った。しかし、(4)のような場合にはまったく触れることができなかった。本稿の目的は、この体験的過去形に焦点をあてて、中田方言の述語の包括的なパラダイムの記述を行うことである。

このような述語構造をもつ方言の文法記述にあたって、過去形の意味・機能を捉えるためには、発話主体の直接体験性というムード的側面を切り離すことはできない。そればかりでなく、述語のパラダイムを、内部で相互にはりあいつつ、意味・機能をわけあっている要素の統合としての、アスペクト・テンス・ムード体系という構造的観点からとらえることが重要である。

従って、下記の順序でパラダイムを記述していくことにする。そして、それぞれの述語のタイプごとに、肯定・否定、普通体・丁寧体、完成相・継続相をも視野に入れたパラダイムを提示し、用例とともに、簡単な説明を行うこととする。

2. 動詞述語

2. 1. 存在動詞

2. 2. 運動動詞

3. 形容詞述語

3. 1. 第1形容詞述語

3. 2. 第2形容詞述語

4. 名詞述語

5. モーダルな複合述語

5. 1. 可能形式

5. 2. 許可・許容形式

5. 3. 義務・必要形式

5. 4. 説明形式

6. 発見・想起用法

なお、この調査のインフォーマントは、筆者のひとりである佐藤里美である。

佐藤里美 1953宮城県登米郡中田町生まれ（男性）

1995まで宮城県内居住

（うち1953～1972, 1979～1995は登米郡内〈中学校国語科教員〉）

現在 沖縄県那覇市在住（1995～）

2. 動詞述語のアスペクト・テンス・ムード体系

2. 1. 存在動詞

存在動詞「アル」「イル」のパラダイムは次のようである。なお、非存在形容詞もあわせて提示しておく。肯定・否定、普通体・丁寧体を問わず、一貫して2つの過去形があることに注意されたい。さらに、「イダ」はアクチュアル性を明示することがあること、丁寧マーカ―と過去マーカ―の位置を異にする変種があることも特徴としてあげられよう。これらの特徴がパラダイムを一見複雑なものにしている。

【表1】ある／ない

		ある		ない	
		普通	丁寧	普通	丁寧
未 来		アル	アリス	ネ	ネガス
現 在		アル	アリス	ネ	ネガス
過 去	体験性中立	アッタ	アリスト アッタガス	ネガッタ	ネガスタ ネガッタガス
	体験性明示	アッタッタ	アリストッタ アッタッタガス	ネガッタッタ	ネガスタッタ ネガッタッタガス

【表2】いる

		肯定		否定	
		普通	丁寧	普通	丁寧
未 来		イル	イス	イネ	イネガス
現 在	アクチュアル性中立	イル	イス	イネ	イネガス
	アクチュアル性明示	イダ	イスタ イダガス		
過 去	体験性中立	イダ	イスタ イダガス	イネガッタ	イネガスタ イネガッタガス
	体験性明示	イダッタ	イスタッタ イダッタガス	イネガッタッタ	イネガスタッタ イネガッタッタガス

アクチュアルな現在の「イダ」の意味・機能については八亀他2005等で既に触れたので略することにする。2つの過去形は、次のように対立している。

- ①「イダッタ」は体験性を明示するが、「イダ」は体験性に中立的である。
- ②「体験」には発話者自身が存在の主体となる場合（直接体験）と、発話者以外の主体の存在を発話者が何らかの知覚によってとらえる場合（知覚体験）とがある。
- ・[体験性中立] オラ キノナ ウツツァ イダ（私は昨日家にいた）
 - ・[直接体験性明示] オラ キノナ ウツツァ イダッタ（私は昨日家にいた）
 - ・[体験性中立] タロー キノナ ウツツァ イダ（太郎は昨日家にいた）
 - ・[知覚体験性明示] タロー キノナ ウツツァ イダッタ（太郎は昨日家にいた）

なお、存在動詞「オリス（おります）」のパラダイムは「イダ」に準じ、丁寧体の動詞の継続相「ステオリス（しております）」形式を形成する補助動詞として文法化しているし、存在動詞「ゴザル」のパラダイムは「アル」に準じ、形容詞述語・名詞述語の丁寧体（デゴザリス体、デガス体（いずれも「でございます」に相当する））の接辞として文法化している。これらにも体験的過去形がそなわっている。

【表3】おる（丁寧体）¹⁾

		肯定	否定
未来		オリス	オリイン
現在	アクチュアル性中立	オリス	オリイン
	アクチュアル性明示	オリスタ	オリイン
過去	体験性中立	オリスタ	オリインカッタ
	体験性明示	オリスタッタ	オリインカッタッタ

【表4】ござる（丁寧体）²⁾

		肯定	否定
未来		ゴザリス（ガス）	ゴザリイン（ガイン）
現在		ゴザリス（ガス）	ゴザリイン（ガイン）
過去	体験性中立	ゴザリスタ（ガスタ）	ゴザリインカッタ（ガインカッタ）
	体験性明示	ゴザリスタッタ（ガスタッタ）	ゴザリインカッタッタ（ガインカッタッタ）

2. 2. 運動動詞

2. 2. 1. アクチュアルな運動

「ノム」を例に運動動詞のパラダイムを提示すると次のようになる。完成相・継続相、肯定・否定、普通体・丁寧体を問わず、やはり一貫して2つの過去形があることに注意されたい。現在テンスの「ノンデダ」の意味・機能は、「イダ」に準じるが、この点は八亀他

2005等を参照されたい。

【表5】飲む³⁾

		肯定			
		普通		丁寧	
		完成相	継続相	完成相	継続相
未来		ノム	ノンデル	ノミス ノムガス	ノンデス ノンデッカス
現在	アクチュアル性中立	—	ノンデル	—	ノンデス ノンデッカス
	アクチュアル性明示		ノンデダ		ノンデスタ ノンデダガス
過去	体験性中立	ノンダ	ノンデダ	ノミスタ ノンダガス	ノンデスタ ノンデダガス
	体験性明示	ノンダッタ	ノンデダッタ	ノミスタッタ ノンダッタガス	ノンデスタッタ ノンデダッタガス

否定			
普通		丁寧	
完成相	継続相	完成相	継続相
ノマネ	ノンデネ	ノマネガス	ノンデネガス
—	ノンデネ	—	ノンデネガス
ノマネガッタ	ノンデネガッタ	ノマネガスタ ノマネガッタガス	ノンデネガスタ ノンデネガッタガス
ノマネガッタッタ	ノンデネガッタッタ	ノマネガスタッタ ノマネガッタッタガス	ノンデネガスタッタ ノンデネガッタッタガス

「ノンデダ」、「ノンデダッタ」の2つの過去形は次のように対立している。

第一過去形「ノンデダ」は、動詞がさしだす動作を発話主体が知覚しているかどうかには関知しない。それに対して、第二過去形「ノンデダッタ」は、当該動作を知覚・体験していない場面では使用できない。たとえば、次の初めの2例で、発話者は階下において母の動作を実際には見ていないし、父は隣の部屋にいるので父の動作は発話者には見えていない。このような場面を、体験的過去形＝第二過去形でさしだすことはできない。

【動作継続】⁴⁾

- ・(そのとき自分は階下にいたが) アンドキ カーチャン ニゲーデ タンスサ フグスマツタダ(*スマツタダッダ) (あのときお母さんは2階でダンスに洋服をしまっていた)

- ・アンドギ トーチャン トナリノ ヘヤデ ビール ノンデダ (*ノンデダッタ) (あ
のときお父さんは隣の部屋でビールを飲んでいた)

次の2例のように、過去に場面を目撃していて、それを記憶から引き出してくるような場合には、第一過去形「ステダ」でも、第二過去形「ステダッタ」でも表現できる。

【結果継続】

- ・[金魚が浮いて動かなかったのを思い出して] キンギョ スンデダ/スンデダッタ (金魚が死んでいた)
- ・[「教室の戸は開いていたか?」と聞かれて、戸が大きく開いていたのを思い出して] ウン アイデダ/アイデダッタ (うん、開いていた)

継続相第二過去形、いわゆる体験的過去「ステダッタ」を使用する場合、発話主体が当該動作を知覚によってとらえている、あるいは、直接体験している、という条件が必須である。次の例では、「(窓を) 開ける、(スイッチを) 切る、(電気が) 消える、(畑に) 行く」のような具体的な過去の動作・変化が、発話者の知覚によってとらえられている。第二過去形は、その過去性と知覚性とを複合的にあらわしているのである。

【動作継続】

- ・[太郎が窓を開けている(窓が開きつつある)のを見たのを思い出して] タロー マド アゲデダッタ (太郎が窓を開けていた)
- ・[スイッチを切っている最中であつたのを思い出して] カーチャン ナガステ スイガ キッテダッタ (お母さんは台所でスイッチを切っていた)

【結果継続】⁵⁾

- ・[真っ暗だったのを思い出して] デンキ キエデダッタ (電気が消えていた)
- ・[おじいちゃんが畑にいたのを思い出して] ズーチャン ハダゲサ イッテダッタ (おじいちゃんが畑に行っていた)

体験的過去があらわす「体験性」は、発話主体による、発話主体以外の主体の運動の知覚(知覚体験)でもあるし、発話主体による運動の実行(直接体験)でもある。後者の場合、発話者が行為者であるから、その文は1人称文ということになる。前者であれば1人称動作主体は排除される。体験的過去によってさしだされる運動は、両者をふくむがゆえに、全体として人称制限はない、ということになる。目撃性のみをあらわすため、人称制限がある言語もあるが、中田方言はそうではない。

【一人称=直接体験】

- ・[さっき何をしていたのかと質問されて] マド アゲデダッタ (窓を開けていた)
- ・[あのおときあなたは何を切っていたの?] スイガ キッテダッタ (スイッチを切っていた)

- ・オラ ソンドギ タロードゴ タダイデダッタ (私はその時太郎を叩いていた)

2. 2. 2. パーフェクト

以上は一回的な＜動作継続＞＜結果継続＞の場合であったが、＜パーフェクト＞＜反復習慣＞の場合にも、2つの過去形の対立が認められる。

体験的過去が表現する知覚性は、運動自体の知覚に限定されてはおらず、運動の痕跡、兆候の知覚をふくみこんでいる。パーフェクトにおいて、発話主体は痕跡の知覚と運動の推論とを統合させる。体験的過去継続相の「ステダッタ」の形は、過去の設定時点以前の運動の完結と効力の残存をあらわしている。つまり、過去パーフェクトを表現している。発話時への効力残存は「ステダ」があらわす。

【パーフェクト・現在・痕跡】

- ・[座ぶとんが温かいのに気づいて] ダレガ コゴサ スワッテダ (誰かがここに座ったのだ)
- ・[お父さんの顔が赤いのを見て] トーチャン サゲ ノンデダ (お父さんが酒を飲んでいる)

【パーフェクト・過去・痕跡】

- ・[女の人はいなかったが香水のにおいが残っていたのを思い出して] オナゴノ ヒトキテダッタ (女の人に来ていた)
- ・[野菜が取ってきてあったのを思い出して] ズーチャン ハダゲサ イッテダッタ (おじいちゃんが畑に行っていた)

「ステダッタ」の現在パーフェクト用法はいまのところ見あたらない。次の例で第二過去形「ステダッタ」を使えば、いずれも過去パーフェクトになる。

- ・ハイタツツァン モー キタ／キテダ (郵便屋さん、もう来た) (*キテダッタ)
- ・モー マド アゲダ／アゲデダ (もう窓開けた) (*アゲデダッタ)
- ・スイガ モー キッタ／キッテダ (スイカ、もう切った) (*キッテダッタ)

2. 2. 3. 反復・習慣

体験的過去の表現形式としての「スタッタ・ステダッタ」は、一回的な個別の動作だけでなく、反復・習慣的な運動をも描き出すことができる。時間的限定をうけない運動であっても、知覚がとらえうるものであれば、体験的過去形を使って伝えることができる。時間の抽象化とともに、アスペクト対立の中和の現象が生じている。

- ・[戦時中の話をしながら] アノ コロ マイヌズ ヒト スンデダ／スンデダッタ／ス

ンダ／スنداッタ（あの頃は毎日人が死んでいた（死んだ））

- ・カーチャン ムガス マイトス イマゴロ フユフグ スマッテダ／スマッテダッタ／スマッタッタ（お母さんは昔、毎年この時期に冬物の洋服をしまっていた）
- ・[お父さんの若い頃のことを話題にして]トーチャン ワゲコロ マイバン サゲ ノンデダ／ノンデダッタ（お父さんは若い頃は毎晩酒を飲んでいた）

2. 2. 4. 恒常的特性

時間の抽象化、主体客体の一般化がさらに進むと恒常的な特性をあらわすようになる。＜恒常的特性＞の場合には、アспект・テンス対立の解体とともに、述語は完成相「スル」のかたちで固定し、運動の主体・客体、時空間、確認の行為の抽象化によって、体験性明示の有無自体がここでは無意味になる。

- ・ヒトワ スヌ（人は死ぬ）
- ・[戸の立て付けが悪い] コノ ト スグ アグ（この戸はすぐに開く）
- ・タロー ギョウギイグ スワル（太郎は（まだ小さいのに）行儀良く座る）
- ・サガナワ コノ ホイジョデ キル（魚はこの包丁で切る）
- ・トーチャン サゲ ノム（お父さんは酒を飲む）
- ・アガンボワ ヨグ ナグ（赤ちゃんはよく泣く）
- ・ホッカイドワ スホンノ チタヌ アル（北海道は日本の北にある）
- ・ウミサ サガナ イル（海には魚がいる）

動詞述語の基本的なパラダイム（叙述法断定・普通体・肯定）は以下のようなになる⁹⁾。個別・一回的な、アクチュアルな運動から、反復・習慣的な、ポテンシャルな運動へと抽象化が進んでも、体験的過去形が保持される。しかも、人称を問わない。

【表6】アクチュアルな運動

		完成相	継続相
未来		ノム	ノンデル
現在	アクチュアル性中立	—	
	アクチュアル性明示		ノンデダ
過去	体験性中立	ノンダ	ノンデダッタ
	体験性明示	ノンダッタ	

【表7】ポテンシャルな運動〈反復・習慣〉

		完成相	継続相
	未来	ノム	ノンデル
	現在		
過去	体験性中立	ノンダ	ノンデダ
	体験性明示	ノンダッタ	ノンデダッタ

3. 形容詞述語

3. 1. 第一形容詞述語

次に、形容詞述語のパラダイムについて確認していく。ここで注目されるのは、存在動詞「イダ」や継続相の動詞「ステダ」とちがって、第一過去形「アゲガッタ（赤かった）」が現在をあらわすことはない、という点である。次の例の述語を「クロガッタ（黒かった）」でおきかえることはできない。あえて「クロガッタ」を使用すれば、後述する〈想起〉か〈発見〉の用法になる。

- ・[花子の黒い髪を見ながら] ハナコノ カミ クロイ（花子の髪は黒い）（*クロガッタ）

紙幅の都合上、以下、簡略化した表を提示する。体験性にかかわる2つの過去形の関係については、基本的に動詞の場合と同様であり、破線で区切られた2つの過去形のうち、上段には体験性に中立的な第一過去形「アゲガッタ」が、下段には体験性を明示する第二過去形「アゲガッタッタ」が配置してある。

【表8】赤い

	肯定		否定	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	アゲ	アゲガス	アゲグネ	アゲグネガス
現在	アゲ	アゲガス	アゲグネ	アゲグネガス
過去	アゲガッタ	アゲガスタ アゲガッタガス	アゲグネガッタ	アゲグネガスタ アゲグネガッタガス
	アゲガッタッタ	アゲガスタッタ アゲガッタッタガス	アゲグネガッタッタ	アゲグネガスタッタ アゲグネガッタッタガス

次の2例のように、特性判断や評価的判断が直接知覚にもとづくものでない場合、第二過去形は使えない。

【表9】 良い

	肯定		否定	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	イ	イガス	イグネ	イグネガス
現在	イ	イガス	イグネ	イグネガス
過去	イガッタ	イガスタ イガッタガス	イグネガッタ	イグネガスタ イグネガッタガス
	イガッタッタ	イガスタッタ イガッタッタガス	イグネガッタッタ	イグネガスタッタ イグネガッタッタガス

・[見たことのない昔の太郎の髪を想像し] タローノ カミ モドワ クロガッタ (*クロガッタッタ) (太郎の髪はもとは黒かっただろう)

・イエヤスワ アダマ イガッタ/イ (家康は頭が良かった/良い) (*イガッタッタ)
次の2例のように、知覚にもとづく特性認知、評価的判断の場合は、第一過去形も第二過去形も使える。第二過去形クロガッタッタを使えば、知覚性が前面化する。

- ・[昔見た太郎の髪を思い出して] タローノ カミ モドワ クロガッタッタ/クロガッタ (太郎の髪はもとは黒かった)
- ・シダテナ ミダ スバイ タマゲダ イガッタッタ/イガッタ (このあいだ見た芝居はとても良かった)

次の例は、判断をおこなう現在時を前面化するか、それとも、本を読んだり山に登ったりした過去時点を前面化するか、そして、後者の場合、読書や登山の直接体験性を明示するかどうかにしたがって、現在形と第一過去形と第二過去形とが使い分けられる。

- ・コノ ホンノ ナガミ イ/イガッタ/イガッタッタ (この本の内容は良い/良かった)
- ・[海外から帰って] マッターホルンワ タゲ/タゲガッタ/タゲガッタッタ (マッターホルンは高い/高かった)

次の2例のように、脱時間的な場合は、判断の主体も判断自体も抽象化する。対象的な内容としての特性の確認や評価的判断は、直接体験によるのでもなければ、知覚によるのでもない。したがって、それを明示する形式=体験的過去形も不要になる。

- ・カラスワ クロイ (からすは黒い)
- ・ヤサイワ カラダサ イ (野菜は体に良い)

イ (良い) は、可能 (スンニイ)、許可 (ステイ)、許容 (ステモイ)、不必要 (スナクテイ) など、後述するモーダルな複合述語の要素として文法化する。これらの複合述語のテンス・ムード体系は、形式的には形容詞「イ (良い)」のそれをひきついでいる。

3. 2. 第二形容詞述語

第二形容詞の場合、第一形容詞とくらべて、第二過去形＝体験的過去形「ゲンキダッタッタ」の使用はかなり限定され、発話者による特性や状態の認知が体験にもとづいていても、それを提示する述語は、体験性に中立的な第一過去形「ゲンキダッタ」でまかなう傾向がある。

【表10】元気だ

	肯定		否定	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	ゲンキダ	ゲンキデガス	ゲンキデネ	ゲンキデネガス
現在	ゲンキダ	ゲンキデガス	ゲンキデネ	ゲンキデネガス
過去	ゲンキダッタ	ゲンキデガスタ ゲンキダッタガス	ゲンキデネガッタ	ゲンキデネガスタ ゲンキデネガッタガス
	ゲンキダッタッタ	ゲンキデガスタッタ ゲンキダッタッタガス	ゲンキデネガッタッタ	ゲンキデネガスタッタ ゲンキデネガッタッタガス

1例目は、知覚体験（目撃）の場合、2例目は直接体験の場合である。

- ・[先月おばさんに会ったときのことを思い出して]オバチャン トツテモ ゲンキダッタッタ／ゲンキダッタ（おばさんはとても元気だった）
- ・[あの頃のあなたは元気でしたか、という質問に]イヤ、ソナヌ ゲンキデワネガスタッタ／ゲンキデワネガスタ（いや、それほど元気ではございませんでした）

広義形容詞に「ゲンキデ（イ）ル（元気である）」がある。中田方言の状態形容詞「ゲンキダ（元気だ）」は、現在テンスにおけるアクチュアリティーにこだわらないのだが、その明示の代用をつとめているのが、「ゲンキデダ（元気である・元気でいた）」である。第一形容詞「ゲンキダ」がアクチュアリティーに無関心であり、使用によっては恒常的特性としての解釈も可能な場合があるとすれば、「ゲンキデダ」は、一回性を前面化し、特性としての解釈を受け取ることをはばんでいる。

そして、「ゲンキデダ」は、ほとんどの場合、現在テンスとして使用されていて、過去における一時的状態は「ゲンキデダ」よりも、「ゲンキデダッタ」であらわすことが多い。ここでも第二過去形は過去テンス性と知覚性（目撃性）の複合として機能している。

- ・[元気そうにしている相手に]アンダ キョーワ イゲーヌ ゲンキデダナ（あなたは今日は思ったより元気だね）
- ・[花子を病院に見舞ったことを思い出して]ハナコ アンドギハ ゲンキデダッタ（花子はあのときは元気だった）

【表11】 元気である

	肯定	
	普通	丁寧
未来	(ゲンキデイル)	ゲンキデッカス ゲンキデイス
現在	(ゲンキデイル)	ゲンキデッカス ゲンキデイス
	ゲンキデダ	ゲンキデダガス ゲンキデイスダ
過去	ゲンキデダ	ゲンキデダガス ゲンキデイスダ
	ゲンキデダッタ	ゲンキデダッタガス ゲンキデイスダッタ

4. 名詞述語

次に、名詞述語の場合について記述する。ここでも注目されるのは、痕跡的にせよ（あるいは萌芽的にせよ）、「小学生ダッタッタ」のような、第二過去形が存在し、やはり体験性というムード的機能と過去性というテンス的意味とを複合的に表現していることである。第二形容詞述語の体験的過去形以上に使用されることがまれな形であって、名詞述語文の過去テンスの表現は、ほとんど第一過去形だけですませている。中田方言母語話者であっても、この種の第二過去形は聞かない、使わないと回答する人もいる。しかし、インフォーマントである佐藤の内省では、この形はあきらかに存在し、複数の中田方言話者から確認もとっている。「小学生デガスタッタ」のような、丁寧体の方が、普通体よりも自然に内省できる。

【表12】 小学生だ⁷⁾

	肯定		否定	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	小学生ダ	小学生デガス	小学生デネ	小学生デネガス
現在	小学生ダ	小学生デガス	小学生デネ	小学生デネガス
過去	小学生ダッタ	小学生デガスタ 小学生ダッタガス	小学生デネガッタ	小学生デネガスタ 小学生デネガッタガス
	小学生ダッタッタ	小学生デガスタッタ 小学生ダッタッタガス	小学生デネガッタッタ	小学生デネガスタッタ 小学生デネガッタッタガス

動詞述語の場合のように、具体的な運動であれば、それをとらえるのは基本的に視覚を

はじめとする知覚である。前述のとおり、話し手の知覚によってとらえられるのでなければ、あるいは話し手が体験するのでなければ、その運動は第二過去形でさしだされることはない。名詞述語文の体験的過去形も基本的には体験性の明示を使命とする。次の例で、幼い頃の祖母を見ていない孫が体験的過去形を使うことはできないが、幼い頃の孫を見ている祖母は使うことができる。話し手自身の直接体験の場合も当然体験的過去形が使える。

- ・[孫が祖母のアルバム写真を見ながら]コノコロ オバアサン マダ ショーガクセーダッタ(ンダ) (*ショーガクセーダッタ) (この頃、おばあさんはまだ小学生だった)
- ・[祖母が孫のアルバム写真を見ながら] コノコロ ハナコワ マダ ショーガクセーダッタ (この頃、花子はまだ小学生だった)
- ・[自分のアルバム写真を見て] コノコロ オラ マダ ショウガクセーダッタ。

しかし、動詞述語の体験的過去形がになう<体験性>と、名詞述語の体験的過去形がになう<体験性>とでは、いくぶん性格が違ってくるだろう。名詞述語の場合、体験的過去形のあらわす体験性は、たとえば動詞述語の場合の視覚体験のように、具体的であるとは限らない。直接経験とか、知覚体験といった、体験性の具体的な性格そのものが、典型的な名詞述語が担う事象の抽象的・一般的な性格と相容れない。典型的な名詞述語がさしだす質や特性や関係は、発話主体の思考の所産であって、経験＝知覚のみによってとらえるものではない。事象の抽象度の高まりに応じて、思考や知識など、知覚外的手段に依存する度合いも高まるであろう。そのような抽象的な事象をさしだす名詞述語文においては、体験的過去形が明示する体験性もまた本来の具体性を相対的に失いつつ、抽象的なものへとずれていく。知覚と思考との間は連続的であり、だからこそ動詞述語や形容詞述語のみならず、名詞述語も体験的過去形をもつ。「石巻はにぎやかな町だった」という判断は、数多くの具体的な体験の一般化の結果として生じる、という点で、アクチュアルな動作をさしだす動詞述語文の一回的、具体的な体験による把握とは当然ことなるだろう。そのような抽象的な体験の主体としての話し手も第二過去形＝体験的過去形を使用することができる。そのような体験をもつ可能性がない話し手は、第二過去形を使用することはできず、第一過去形＝中立的過去形をもちいて、事象を一般的な知識として提示することができるのみである。

- ・[戦前生まれの古老が回想して]イスノマギワ センゼンカラ ニギヤガナ マズダッタ (石巻は戦前からにぎやかな町だった)
- ・イスノマギワ エドズダイカラ ニギヤガナ マズダッタ (*マズダッタ) (石巻

は江戸時代からにぎやかな町だった)

相対的な抽象化にもかかわらず、体験性明示の有無という、第一過去と第二過去の意味的・機能的対立は名詞述語においても維持されている。次の例のような一般的な命題をさしだす文でさえ、あえて体験的過去で述べれば、発話者の体験談になるし、体験性に中立的な第一過去で述べれば、発話者から距離をとった、一般的知識としての命題を伝えることになる。

- ・イネガリワ ムガスワ ジューロードーダッタ／ジューロードーダッタッタ (稲刈りは昔は重労働だった)
- ・ミズワ ヒャクショーノ イノズダッタ／イノズダッタッタ (水は農民の命だった)

逆に、動詞述語でもあらわせるような具体的な事象は、比較的違和感なく体験的過去でさしだすことができる。このような例は名詞述語の中では周辺的である。

- ・カーチャン サッキナマデ ゴハンズメダッタッタ (お母さんはさっきまで食事の準備をしていた)
- ・トーチャン ユーベカダ オソグマデ ナワネーダッタッタ (お父さんは夕べは遅くまで縄ない仕事だった)

述語の対象的な、意味的な内容と発話者によるそのとらえ方とのかかわりの中で、体験的過去形の表現する具体的な意味・機能をとらえなければならないのだが、一切は今後の課題とする。

5. モーダルな複合述語

体験的過去は、モーダルな複合述語にもおよんでいる。ここでは、可能形式、許可・許容形式、義務・必要形式、説明形式をとりあげ、パラダイムと体験的過去の用例を付し、簡単な解説をくわえる。

【表13】 飲むことができる⁹⁾

	可能		不可能	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	ノムニイ	ノムニイガス	ノマエネ	ノマエネガス
現在	ノムニイ	ノムニイガス	ノマエネ	ノマエネガス
過去	ノムニイガッタ	ノムニイガスタ ノムニイガッタガス	ノマエネガッタ	ノマエネガスタ ノマエネガッタガス
	ノムニイガッタッタ	ノムニイガスタッタ ノムニイガッタッタガス	ノマエネガッタッタ	ノマエネガスタッタ ノマエネガッタッタガス

5. 1. 可能形式

中田方言の代表的な可能表現の述語の形式は、肯定形ではくスルニ+形容詞イ（良い）の構造であり、否定形（不可能形）は「しえない」から転じたであろう「サエネ」の形である。いずれも形容詞型の活用を引きついでいて、やはり2つの過去形をもつ。動作主体=能力主体が発話者以外である場合（知覚体験）と、発話者自身である場合（直接体験）とがある。3例目は、発話者による知覚も直接体験も不可能なので、第二過去形を使用することができない。

- ・[今朝見たおじいさんの様子を報告して]ズンチャン ケサワ タイチャー イガッタガラ ズブンデ オギムグンヌ イガスタッタ（おじいさんは今朝は体調がよかったので、自分で起きることができました）
- ・オラ ハラヘッテ ヌモツ ヒトツツモ ハゴバエネガッタッタ（私はおなかのすいて、荷物を1つも運ぶことができなかった）
- ・[歴史を学んだ現代の生徒がいう場合]センゼンワ ズユーヌ モノ イワエネガッタ（*イワエネガッタッタ）（戦前は自由にものを言うことができなかった）

5. 2. 許可・許容形式

【表14】飲んでいい・飲んではいけない

	許可・許容		不許可	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	ノンデイ	ノンデイガス	ノンデワガンネ	ノンデワガンネガス
現在	ノンデイ	ノンデイガス	ノンデワガンネ	ノンデワガンネガス
過去	ノンデイガッタ	ノンデイガスタ ノンデイガッタガス	ノンデワガンネガッタ	ノンデワガンネガスタ ノンデワガンネガッタガス
	ノンデイガッタッタ	ノンデイガスタッタ ノンデイガッタッタガス	ノンデワガンネガッタッタ	ノンデワガンネガスタッタ ノンデワガンネガッタッタガス

可能の場合と同じように、過去マーカーが先行する<タガス系>と、丁寧マーカーが先行する<ガスタ系>とがある。中田方言の「ワガンネ」は、理解できないという意味ではなく、不可能や禁止、不許可をあらわし、叙述法としては「(しては) いけない」の意味になる。やはり、体験性明示・中立を表し分ける2つの過去形がある。

- ・シュグダイ オワツラ ソドサ デハッテモ イガッタッタ（宿題が終わったら、外に出てもよかった）
- ・[親のいいつけで]カゼ ナオンネ ウズ トゴガラ オギデワガンネガッタッタ（私

は) 風邪が治らないうちは床から起きてはいけなかった)

5. 3. 義務・必要形式

【表15】飲まなければならない・飲まなくていい

	義務・必要		不必要	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	ノマネゲネ	ノマネゲネガス	ノマネデイ	ノマネデイガス
現在	ノマネゲネ	ノマネゲネガス	ノマネデイ	ノマネデイガス
過去	ノマネゲネガッタ	ノマネゲネガスタ ノマネゲネガッタガス	ノマネデイガッタ	ノマネデイガスタ ノマネデイガッタガス
	ノマネゲネガッタッタ	ノマネゲネガスタッタ ノマネゲネガッタッタガス	ノマネデイガッタッタ	ノマネデイガスタッタ ノマネデイガッタッタガス

中田方言の義務・必要形式は、「飲まなければならない」に相当する「ノマネゲネ」であり、その義務がないこと、不必要を表現する形式は「飲まないでいい」に相当する「ノマネデイ」である。やはり2つの過去形をもち、「ノマネゲネ」は否定形容詞「ネ」の活用を、「ノマネデイ」は形容詞「イ〈良い〉」の活用を引き継いでいる。

- ・[手紙を書くのを忘れていたことに気づいて]シンシサ テガミ カガネゲネガッタッタ ((私は) 先生に手紙を書かなければならなかった)
- ・[花子が町に行かなくてはならないことを思い出して]ハナコ マツァ イガネクテネガッタッタ (花子は町に行かなければならなかった)
- ・[電話するの必要がなかったことに気づいて]デンワスネデ イガッタッタ ((私は) 電話しなくてもよかった)
- ・[太郎が小鳥に餌をやる必要がなくなったことを思い出して]タロー トリコサ エサヤンテモ イガッタッタ

【表16】のだ① 飲むのだ・飲むのだった⁹⁾

	肯定		否定	
	普通	丁寧	普通	丁寧
するのだ	ノムンダ	ノムンデガス	ノムンデネ	ノムンデネガス
するのだった	ノムンダッタ	ノムンダッタガス ノムンデガスタ	ノムンデネガッタ	ノムンデネガッタガス ノムンデネガスタ
	ノムンダッタッタ	ノムンダッタッタガス ノムンデガスタッタ	ノムンデネガッタッタ	ノムンデネガッタッタガス ノムンデネガスタッタ

5. 4. 説明形式

「のだ」の前要素が非過去形「ノム」の場合、「のだ」が第一過去形をとる「ノムンダッタ」の形と、第二過去形をとる「ノムンダッタッタ」の形は、おおくが〈想起〉か〈反実仮想〉を表現する。

- ・〈想起〉 [この酒は誰が飲む予定なのかと聞かれ、太郎が飲むことにきまっていたことを思い出して]「コノ サゲ タロー ノムンダッタ／ノムンダッタッタ」((そういえば) 太郎がこの酒を飲むのだった)
- ・〈反実仮想〉 [薪が足りなくなったことを後悔して] モット イッペ マギ ワットグンダッタ／ワットグンダッタッタ ((私は) もっといっぱい薪を割っておくんだった)
- ・〈反実仮想〉 [きちんと薬を飲まなかったことを後悔して] チャント クスリ ノムンダッタ／ノムンダッタッタ ((私は) ちゃんと薬を飲むのだった)

【表17】のだ② 飲んだのだ・飲んだのだった¹⁰⁾

	肯定	
	普通	丁寧
したのだ	ノンダンダ	ノンダンデガス
	ノンダッタンダ	ノンダッタンデガス
したのだ った	ノンダンダッタ	ノンダンデガスタ ノンダンデガスタッタ
	?ノンダッタンダッタ	ノンダッタンデガスタ ?ノンダッタンデガスタッタ

否定	
普通	丁寧
ノンダンデネ	ノンダンデネガス
ノンダッタンデネ	ノンダッタンデネガス
ノンダンデネガッタ ノンダンデネガッタッタ	ノンダンデネガッタガス ノンダンデネガッタッタガス
ノンダッタンデネガッタ ?ノンダッタンデネガッタッタ	ノンダッタンデネガッタガス ?ノンダッタンデネガッタッタガス

「のだ」の前要素が過去形「ノンダ」の場合、「のだ」が第一過去形をとる「ノンダンダッタ」の形と、第二過去形をとる「ノンダンダッタッタ」の形は、ほとんどが〈想起〉を表現する。

- ・〈想起〉 [この落書きは誰が書いたかと聞かれて、自分が書いたことを思い出して] オレ カイダンダッタ／カイダンダッタッタ ((そういえば) 私が書いたのだった)

- ・〈想起〉「花子が公園の中を歩いたのを見たことを思い出して」ハナコ コウエンナガ
アルイダングダッタ／アルイダングダッタッタ（（そういえば）花子は公園の中を歩いたの
だった）

「のだ」の前要素が第二過去形「ノングダッタ」の場合、つまり表17中の最下段の、体験性マーカーを2つかさねた形式「ノングダッタングダッタッタ」はまずありえないと思われるが、今後確認が必要である。

【表18】わけだ・わけで（は）ない

	肯定		否定	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	ワゲダ	ワゲデガス	ワゲデネ	ワゲデネガス ワゲデガイン
現在	ワゲダ	ワゲデガス	ワゲデネ	ワゲデネガス ワゲデガイン
過去	ワゲダッタ	ワゲデガスタ ワゲダッタガス	ワゲデネガッタ	ワゲデネガスタ ワゲデネガッタガス ワゲデガインカッタ
	ワゲダッタッタ	ワゲデガスタッタ ワゲダッタッタガス	ワゲデネガッタッタ	ワゲデネガスタッタ ワゲデネガッタッタガス ワゲデガインカッタッタ

「ワゲダ」を用いた複合述語に体験的過去が使われている例をあげておく。前者は結果の説明、発話主体の直接体験の場合であり、後者は部分否定の表現、三人称主体の状態の、発話主体による知覚体験の場合である。

- ・オソワッタ トーリ イッタツケ、ウツツァ ツイダ ワゲデガスタ／ワゲデガスタッタ（（私は）教わった通りに行ったら、家に着いたわけでした）。

【表19】はずだ・はずがない

	はずだ		はずがない	
	普通	丁寧	普通	丁寧
未来	ハズダ	ハズデガス	ハズネ	ハズネガス ハズガイン
現在	ハズダ	ハズデガス	ハズネ	ハズネガス ハズガイン
過去	ハズダッタ	ハズデガスタ ハズダッタガス	ハズネガッタ	ハズネガスタ ハズネガッタガス ハズガインカッタ
	?ハズダッタッタ	ハズデガスタッタ ?ハズダッタッタガス	ハズネガッタッタ	ハズネガスタッタ ?ハズネガッタッタガス ?ハズガインカッタッタ

- ・ネーチャン コドモノ ゴド ゼンプ スッテル ワゲデワネガッタ／ワゲデワネガッタッタ（お姉さんは子供のことを全部知っているわけではなかった）

最後に、「ハズダ」の場合を見ておく。はじめの2つの例は「過去における予想・予定の確認」をあらわし、3つ目の例は「出来事の実現する可能性が過去において欠けていることの確認」をあらわしている¹¹⁾。

- ・キノナノ コンサート スズズヌ ハズマル ハズダッタ／ハズダッタッタ（昨日のコンサートは7時に始まるはずだった）
- ・タロー クルマノ メンキョ トルハズデガスタ／トルハズデガスタッタ（太郎は車の免許を取るはずでした）
- ・[雨雲の様子を思い出して] アメ アガルハズガインカッタ／アガルハズガインカッタッタ（雨が上がるはずはございませんでした）

これらの説明形式「のだ」「わけだ」「はずだ」の第二過去形＝体験的過去形「ノダッタッタ」「ワゲダッタッタ」「ハズダッタッタ」、およびこれらの否定形、丁寧体に見られる第二過去形が、実際にどの程度使用されているのか、どのような意味・機能をもつのかについてはほとんど分かっていない。詳細な調査は今後の課題として、ここでは、第一過去形にくらべて使用頻度こそ圧倒的に少ないとしても、このようなテンス形式が存在し、体験性にかかわるなんらかのムード的な意味の表現手段として機能していることの指摘に留める。

6. いわゆる発見・想起用法について

6. 1. 発見

次に、ふたつの過去形と発見・想起用法の関連について見てゆく。発話時において成立している事象にもかかわらず、その事象を過去形でさしだす用法には、発話時に新しい事実を確認する発見用法と、すでに確認済みの事実を発話時に再確認する想起用法とがある。まず発見用法であるが、存在動詞アルの場合、第一過去形「アッタ」は発見をあらわせるが、第二過去形「アッタッタ」はあらわせない。形容詞述語の場合、第一過去形「アゲガッタ」は発見をあらわせるが、第二過去形「アゲガッタッタ」はあらわせない。名詞述語の場合、第一過去形「イシャダッタ」は発見をあらわせるが、第二過去形「イシャダッタッタ」はあらわせない。存在動詞「イダ」は、アクチュアルな現在をあらわせるため、「イダ」も第二過去形「イダッタ」も発見をあらわせる。運動動詞の継続相の場合「カイデダ」も、

第二過去形「カイデダッタ」も、発見をあらわせる。

- ・〈存在動詞アル〉(探していた品を見つけて)アッタ、アッタ(あった、あった)(*アッタッタ、アッタッタ)
- ・〈形容詞〉ヤ タロー アス ハエガッタ(ンダ)(おや、太郎は足が速かった)(*ハエガッタッタ)
- ・〈名詞〉ソーガ タロー イシャダッタ(ンダ)(そうか、太郎は医者だったんだ)(*イシャダッタッタ)
- ・〈存在動詞イル〉[探していた飼い犬が見つかって]ア、イダ、イダ(あ、いた、いた)コイナドゴサ イダ/イダッタ(こんなところにいた)
- ・〈運動動詞継続相〉[絵を描いている太郎を見つけて]ソーダッタノガ、タロー エカイデダノガ/カイデダッタノガ(そうだったのか、太郎は絵を描いていたのか)

6. 2. 想起

つづいて、想起用法の場合について見てゆく。存在動詞「アル」の場合、第一過去形「アッタ」、第二過去形「アッタッタ」ともに想起をあらわせる。形容詞述語「ハエ(速い)」の場合、第一過去形「ハエガッタ」、第二過去形「ハエガッタッタ」ともに想起をあらわせる。名詞述語「イシャダ(医者だ)」の場合、第一過去形「イシャダッタ」は想起をあらわせるが、第二過去形「イシャダッタッタ」が想起をあらわせるかどうかは微妙である。存在動詞「イル」の場合、第一過去形「イダ」、第二過去形「イダッタ」ともに想起をあらわせる。運動動詞「カグ(描く)」の場合、第一過去形「カイデダ」、第二過去形「カイデダッタ」ともに想起をあらわせる。

- ・〈存在動詞アル〉[今、ケースの中にメガネがあることに思っていた]ンダッタ、メガネ ケースン ナガサ アッタ/アッタッタ(そうだった、眼鏡はケースの中にあった)
- ・〈形容詞〉タスカ タロー アス ハエガッタ/ハエガッタッタ(確か太郎は足が速かった)
- ・〈名詞〉ンダッタ、タロー イシャダッタ/(そうだった、太郎は医者だった)(*?イシャダッタッタ)
- ・〈存在動詞イル〉タスカ アイヅニワ ハダヅニ ナル ムスコ イダ/イダッタ(確か、あいつには二十歳になる息子がいた)
- ・〈運動動詞継続相〉[太郎がいま絵を描いていることに思い至って]ンダッタ、タロー エカイデダ(ンダ)/カイデダッタ(ンダ)(そうだった、太郎は絵を描いていたん

だ)

【表20】

	発見		想起	
	第一過去	第二過去	第一過去	第二過去
存在動詞述語アル	○アッタ	×アッタッタ	○アッタ	○アッタッタ
形容詞述語	○ハエガッタ	×ハエガッタッタ	○ハエガッタ	○ハエガッタッタ
名詞述語	○イシャダッタ	×イシャダッタッタ	○イシャダッタ	?イシャダッタッタ
存在動詞述語イル	○イダ	○イダッタ	○イダ	○イダッタ
運動動詞継続相	○カイデダ	○カイデダッタ	○カイデダ	○カイデダッタ

7. おわりに

以上、体験的過去形に焦点をあてて、述語構造の包括的記述を行ってきた。従来の方言文法調査では、せいぜい、「ノンダ」、「ノンデダ」に対して、「ノンダッタ」、「ノンデダッタ」のような形式があるという指摘に留まってしまうのであるが、重要なことは、2つの過去形における直接体験性の有無というムード対立が、すべての述語に貫徹しているという事実である。これは、この方言において、発話時以前というテンス的側面と発話主体の直接体験というムード的側面とが、相互に切り離せないかたちで述語構造を形成していることを示している。過去の出来事においてこそ、発話主体の直接体験というムード的側面が重要になってくるのである。標準語では、このような発話主体の体験性の有無にはこだわらないのであるが、過去の出来事の表現において、発話主体の体験性を明示する方言(言語)があっても不思議ではない。

5節で指摘したように、このような2つの過去形が、モーダルな複合述語においても成立している。これは、モーダルな複合述語の記述においてもなお、テンス的側面と体験性というムード的側面をも視野にいれて、総合的に記述していかなければならないことを示しているのである。この点の精密な記述は今後を期したい。¹²⁾

追記：本稿は、科学研究費補助金基盤研究 (B)(1)「方言における述語構造の類型論的研究」(研究代表者・工藤真由美)の研究成果の一部である。

【注】

1) 「オル」は丁寧体の「オリス」形だけが見つかわれ、普通体は「イル」で代用される。「イン」

は丁寧体否定接辞；「ヨミイン」（＝読みません）「ヨミインカット」（＝読みませんでした）。「オリス」には、「オリストゴザリス」「オリストガス」「オリストス」の変種がある。「オリス（←オリマス）」が文法化した「ノンデオリス」と、「イス（←イマス）」が文法化した「ノンデス」とでは、前者がより丁寧。

- 2) 「ガス」は「ゴザリマス→ゴザリス→ガス」のように、「ガイン」は「ゴザリマセン→ゴザリイン→ガイン」のように転移したもの。本動詞用法（「コノ ミセサ ノゴギリ ガスカ（この店にのこぎりありますか？）」「ガス（ございます）／いや、ガイン（ございませぬ）」）と丁寧形接辞用法（「ノンデダガス」など）とがともに生きている。
- 3) 「ノンデダ」には音声の変種として「ノンデア」があり、「ノンデダック」の音声の変種として「ノンデアック」がある。「のみました・のんでいました」（丁寧＋過去）にあたる「ノミスタ・ノンデスタ」のほかに、「のんだです・のんでいたです」（過去＋丁寧）の構造をもつ「ノンダガス・ノンデダガス」がある。さらに、より丁寧な、形態的には「のみましてございます」にあたる「ノミステガス（ノミステス）」がある。これは、丁寧動詞「ノミマス」の第二なかどめ形「ノミステ（のみまして）」に存在動詞「ガス」がついたものであろう。
- 4) 以後、「*」を「不可」「不適合」の意味の記号として用いる。
- 5) 中田方言では、主体動作客体変化動詞は継続相の形で〈客体の変化結果の継続〉、いわゆる〈客体結果〉をあらわすことがある。次の例では、そのようなアスペクト的な意味と体験的過去とが複合的に表現されている。
 - ・[太郎が窓を開けてしまっていた（窓は開いていた）のを思い出して] タロー マド アゲデダック（太郎が窓を開けていた）
 - ・[切ったスイカが置いてあったのを思い出して] カーチャン スイガ キッテダック（お母さんがスイカを切っていた）
 - ・[タンスの中に洋服が入っていたのを思い出して] カーチャン タンスサ フグ スマッテダック（お母さんがタンスに洋服をしまっていた）
- 6) 叙想法・推量の場合も、一貫して2つの過去形が認められる。参考までに、パラダイムを掲げ、簡単な説明を付しておく。この種のムード、モーダルな複合動詞の意味・機能に踏み込んだ調査については別稿を予定している。

「ノンデネベ（のんでいないだろう）」に対して「ノマネデッペ（のまないでいるだろう）」のかたちがある。「ノマネデッペ」は意志法としてもはたらく（のまないでいよう）。「ノンデネガスベ（のんでいないでしょう）」に対して、「ノマネデスベ・ノマネデッカスベ（のまないでいるでしょう）」のかたちがある。「ノマネデスベ」は意志法としてもはたらく（のまないでいましょう）。

ベス系（ノムベス、ノンデッペス、ノマネベス、ノマネデッペス）は勧誘にだけ使用される。-be(pe)su は丁寧さマーカーとしてより、聞き手志向性マーカー＝勧誘マーカーとして機能している。ベ系（ノムベ、ノンデッペ、ノマネベ、ノマネデッペ）、スペ系（ノミスベ、ノンデスベ、ノマネスベ、ノマネデスベ）は意志にも勧誘にも使用される。

【表21】叙想法 のむだろう・のんでいるだろう

	肯定			
	普通		丁寧	
	完成相	継続相	完成相	継続相
未来	ノムベ	ノンデッペ	ノミスベ ノムガスベ	ノンデスベ ノンデッカスベ
現在	—	ノンデッペ	—	ノンデスベ ノンデッカスベ
		ノンデダベ		ノンデスタベ ノンデダガスベ
過去	ノンダベ	ノンデダベ	ノミスタベ ノンダガスベ	ノンデスタベ ノンデダガスベ
	ノンダッタベ	ノンデダッタベ	ノミスタッタベ ノンダッタガスベ	ノンデスタッタベ ノンデダッタガスベ

否定			
普通		丁寧	
完成相	継続相	完成相	継続相
ノマネベ	ノンデネベ	ノマネガスベ	ノンデネガスベ
—	ノンデネベ	—	ノンデネガスベ
ノマネガッタベ	ノンデネガッタベ	ノマネガスタベ ノマネガッタガスベ	ノンデネガスタベ ノンデネガッタガスベ
ノマネガッタッタベ	ノンデネガッタッタベ	ノマネガスタッタベ ノマネガッタッタガスベ	ノンデネガスタッタベ ノンデネガッタッタガスベ

【表22】意志勧誘法 のもう・のむまい

	肯定			
	普通		丁寧	
	完成相	継続相	完成相	継続相
意志・勧誘	ノムベ	ノンデッペ	ノミスベ ノムベス	ノンデスベ ノンデッペス

否定			
普通		丁寧	
完成相	継続相	完成相	継続相
ノマネベ	ノマネデッペ	ノマネスベ ノマネベス	ノマネデスベ ノマネデッペス

【表23】 命令法

	肯定			
	普通		丁寧	
	完成相	継続相	完成相	継続相
命令	ノメ	ノンデロ	ノマセ	ノンデセ

	否定			
	普通		丁寧	
	完成相	継続相	完成相	継続相
	ノムナ	ノマネデロ ノンデンナ	ノミンスナ	ノマネデセ ノンデンスナ

-(a) se は丁寧体命令語尾。「とりなさい」は「トラセ」、「かきなさい」は「カガセ」「見なさい」は「ミセ」、「おきなさい」は「オギセ」、「うけなさい」は「ウゲセ」のようになる。「ノマネデロ」は「のまないでいろ」に相当する。「ノンデンナ」は「のんでいるな」に相当する。「ノミンスナ」は「のみなさるな」に相当する。「ノマネデセ」は「のまないでいなさい」に相当し、「ノマネデイサエ」ともいう。「ノンデンスナ」は「ノンデイスナ」から転じたもの。「のんでいなさるな」に相当する。

- 7) 名詞述語には、普通体(ダ体)、丁寧体(デガス体)のほかに、デゴザリス体があり、その否定には「ゴザライン体」とその変種の「ガイン体」とがある。活用のし方は前述の存在動詞「ゴザリス」に準じる。

【表24】 小学生デゴザリス

	肯定	否定	
		ゴザライン体	ガイン体
未来	小学生デゴザリス	小学生デゴザライン	小学生デガイン
現在	小学生デゴザリス	小学生デゴザライン	小学生デガイン
過去	小学生デゴザリスタ	小学生デゴザラインカッタ	小学生デガインカッタ
	小学生デゴザリスタッタ	小学生デゴザラインカッタッタ	小学生デガインカッタッタ

- 8) 「ノムニグネ」や「ノマエル」の形はない。
- 9) 完成相「ノムンダ(ノムンデガス)」に対する継続相「ノンデンダ(ノンデンデガス)」も肯定・否定の対立をもつ。
- 10) 完成相「ノンダンダ(ノンダンデガス)」に対立する継続相「ノンデダンダ(ノンデダンデガス)」, 「ノンデダッタ(ノンデダッタンデガス)」もそれぞれ肯定・否定の対立をもつ。
- 11) 奥田(1993) p. 196~208参照。
- 12) 第二過去形は基本的に体験性明示として機能するのだが、①過去パーフェクト用法②反実仮想用法という体験性の有無に無関心な場合もある。第二過去形が現実性を前面化させつつ発話主体の体験性の明示として機能する一方で、非現実性を前面化させる場合があるとすれば、このふたつの機能の分化の出発点に過去パーフェクトというハイブリッドなカテゴリーがあったということは十分に考えられる。欧米の類型論的研究でも指摘されている、こうした文法化の経路の詳細についても別稿を期したい。

【参考文献】

- 奥田靖雄(1988)「文の意味的なタイプ—その対象的内容とモデルな意味とのからみあい—」『教育国語』92号
- 奥田靖雄(1996)「文のこと—その分類をめぐって—」『教育国語』2-22号
- 奥田靖雄(1993)「説明(その3)—はずだ—」『ことばの科学』6号 むぎ書房
- 金田章宏(1983)「東北方言の動詞のテンス—山形県南陽市—」『琉球方言と周辺のことば』千葉大学教養部
- 工藤真由美(2004)「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 工藤真由美編著(2004)『日本語のアスペクト・テンスムード体系—標準語研究を超えて—』ひつじ書房
- 小林隆編(2003)『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 佐藤里美(1997)「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞のばあい—」『ことばの科学 10』むぎ書房
- 渋谷勝己(1994)「鶴岡方言のテンスとアスペクト」国立国語研究所報告109-1『鶴岡方言の記述的研究』秀英出版
- 高田祥司(2003)「岩手県遠野方言のアスペクト・テンス・ムード体系—東北諸方言における動詞述語の体系変化に注目して—」『日本語文法』3-2 日本語文法学会 くろしお出版
- 竹田晃子(2000)「岩手県盛岡市方言におけるタツタ形の意味用法」『国語学研究』39東北大学文学部国語学研究室内国語学研究刊行会
- 松丸真大(2004)「静岡県榛原郡中川根方言の過去表現」『静岡・中川根方言の記述』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室
- 宮島達夫(1956)「文法体系について—方言文法のために—」『国語学』25 国語学会 武蔵野書院
- 八亀裕美(2002)「〈短信〉非動詞的述語の継続相相当形式—青森五所川原方言の場合—」『国語学』208 国語学会 武蔵野書院
- 八亀裕美・佐藤里美・工藤真由美(2005)「宮城県登米郡中田町方言の述語のパラダイム—方言のアスペクト・テンス・ムード体系記述の試み—」『日本語の研究』1-1 日本語学会 武蔵野書院

工藤(文学研究科教授)

佐藤(琉球大学法文学部助教授)

八亀(本学留学生センター専任講師)